成覺房幸西の跡を探る

梶原隆也

宗祖法然上人の高弟に成覺房幸西有り、一念往生の義を立て、一念に往生せしむる本願あるに、何ぞ多念相續して往生を望んとするや、これは自己の力を頼むものにして、即ち自力の行者なり。戒行何すれぞ持つ、罪悪何ぞ恐れんや、強大なる弥陀の願力に乗じ、戒行、罪悪問う所に非ず、而も弥陀の本願たるや、罪悪の凡夫の為に定められたる所、吾等は唯其本願を信じて疑ひを挿まず、全然自力の心を捨て、只佛の願力に依れ、とて極力多念相續に反対し、純他力本願をすゝめた。

勅伝第二九に曰く「比叡山西塔の南谷に鐘下房の少輩とて聰敏の住僧ありけり。弟子の児にをくれて眼前の無常に驚き、交衆ものうくおぼへければ、三十六の年遁世して上人の弟子となり、成覺房幸西と号しけるが、浄土の法門を本ならへる天台宗に引入れて、巫門の弥陀、本門の弥陀といふことをたてて、十劫正覺と云へるは巫門の弥陀、本門の弥陀は無始本覺の如来なるが故に、我等所具の佛性とまったく差異なし、此謂をきく一念にことたりぬ。多念の数遍はなほだ無益なりと云ひて、一念義と云う事を自立しけるを、上人此を聞き幸西尚の御心にそむけり、はなはだしかるべからざるよし、制し仰せられるを承引せずしてなほ此義を興しければ、わが弟子にあらずとて擯出せられにけり」

勅伝第四八に曰く、「このほか法本房行空、成覺房幸西は、ともに一念義を立てて上人の命にそむきしによりて、門徒を擯出せられき。覺明房長西は、上人没後に出雲路の住心房に依止し、諸行本願のむねを執して選択集に違背す。此三人随分名誉のにたりと云へども上人の冥慮ばかりがたきによりて門弟の列にのせざるところなり。見ん人あやしむ事なかれ」と

随分名誉の彼も遂に学を頼みて一念義を立て、念佛の行の相續を失った。而し彼がたとへ上人の教へに違背してその門下を擯出されたとは云へ、彼が思索は理無さに非ず、聖論豎然としてなかなかの学識があったと想像される。又彼の主張が余りに相違せるを以て、異端として宗祖の門下を擯出されたとか、或は普通宗祖門下の別義を建立し、一派を形成したるものを浄土四流となし、聖光、證空、隆寛、長西を挙げ幸西を除いている事、之等の説は幸西を排斥し過ぎている感がある。浄土源流章（浄全十五）等によりその主張を窺ふに、その所立は證空の所立と相離るとも沢して違きものに非ず。若し一念義の故を以て門下に列せずとするならば、證空も上人違背の門弟となる。幸西、行空、證空、親鸞等の主張は一系の上に立ちて、唯程度

の差こそ有れ皆他力本願を弘むるものである。法然上人の所立亦自力聖道門に非ず、他力本願の一端を主張するものならば、幸西の所立もかう甚だしく異るとは思えない。この故を以て彼の末路亦同情に価ひするものがある。

今昔にさか上りて世縁をさぐり、彼が長七の跡を尋ねて見ようと思う。

幸西の略歴

彼の伝記は詳かならず、其始めは比叡山西塔南谷に在りと雖も、宗祖の墳出を蒙り、列祖の攻撃に会い、其終は知る可からず。或は云う越前にて還俗したるならんと。即ち……

幸西、俗姓御貫を詳かにせず。或は拾遺古徳伝七に物部氏と記し、或は義山の御伝翼賛遺事（浄全十六）に、「……平貞盛文治元年（一一八五）命を西海に投ずるの後遷腹の子有り。江州津田の荘津田権太夫親冬が元に生長す。童名津田先生権太郎親実、或作親真　後比叡山に登りて出家す。覚盛法師、後改成覚と号し顕宗の学に長じ博識広聞なり……」と記す。

彼少壮の頃比叡山西塔南谷に住し鏡下房小輔と号していたが、事縁にふれ無常を悟り、三十六歳にして上人の門に入り、出家して成覚房幸西と改む。以後宗乗を修学せしが次第に自己の理論を唱へ、宗祖の教訓に満足せずして新たに一念の新義を主張するに至り、兵部卿三位基親は彼と一念多念の是非を論諍したと云はれる。後宗祖の教訓を守らず尚一念義を流布した為、承元三年（一二〇九）遂に宗祖は彼に対して一念義停止の状を発せられた。尚勅伝二九等には「なほ此義を興しければ、わが弟子にあらずとて擯出せられにけり」と、幸西が破門された事を記しているが、元久元年（一二〇四）の七箇條制誡文に第十五位に署名している所を見れば、この破門が事実としても、元久元年十一月以後と思はれる。又拾遺古徳伝七には建永二年（一二〇七）宗祖土佐へ配流の際、彼も亦阿波口へ流されたと記しているが、浄土宗流章にも幸西の流義が阿波に弘通していた事を記しているから、あながち根據の無い事でもなさそうである。宗祖滅後、嘉禄三年（一二二七）の難には幸西も念仏の張本人として、隆寛、空阿等と共に流刑に處せられたと云はれ、百練抄十三には壱岐島、十巻伝十には伊豫に流されたと記し、又日蓮の念仏者追放宣状事には讃岐の大手島辺を排徊すと記されている。

嘉禄三年以後の幸西の消息は漠然としてわからないが、御伝翼賛遺事（浄全十六、九六七頁）に曰く「然るに上人配口の後、覚盛法師（成覚）綽空（後号親鸞）と相伴ひて越後口に下向す。先づ城小太郎隼人佐基親の許に到る。以て念仏宗を興隆せんと欲し説法勧化す。歳余にして

覚盛法師、綽空相共に捨戒し師の教誡を廃す、是に因明信、入真、善性、勧信の六名を改め、善性の門に永

覺盛法師、緯空相共に信戒し師の教誡を奉ず、是に因つて永く門弟を放ち出家、後覺盛法師越後口に赴き終に遷化して、織田大明神職の婿となる」と、又五重塔遷移中、五重塔遷見聞等に曰く、「宗祖門下を放逐せらるるの後、下總国栗原郷に赴き道場を建てて道俗を勧化し、其門人永く此に止住せり……」と、これも亦一説である。

彼の年齢は共に詳かではないが、法水分流記、蓮門宗派、宗派流伝等皆宝治元年（一二四七）四月十四日寂、年八十五となっている。

幸西の著述としては、浄土源流章（浄全十五）に略料簡、一諦記、称仏記の三部を記し、最須敬重絵詞第五には四頁一条、略観至義、略料簡、指心偈、時法勧の五部を記すれども、何れも現存せず。現存せるものとして、宗師和尚類聚伝、玄義分抄各一巻がある。

（参考資料）

浄土法門源流章（浄全十五）、三長記、百練抄十三、勅伝二十九、四八、問答賞二十九、二十三、四十二、四十八、五十八、拾遺古德伝七、十巻伝十（浄全十七）、九巻伝（同上）、浄土伝燈総系譜（浄全十九）、法水分流記、蓮門宗派、宗派流伝、本朝高僧伝十三（併全一〇二冊）等有り。

幸西の門下及び弘通

幸西の門下として、浄土源流章には、正定、正縁、明信、入真、善性、勧信の六名をあげ、善性の門に永信、仏弋の居た事を記している。

浄土伝燈総系譜下には、右の外、幸西の門に了智、明教、浄真、教真、證憲、了教、了円、承真、正円を加へ、了智の門に了教、證憲、教信の三名、入真の門に願心、浄信の門に慈道、承真、尊信、了真の四名を挙げている。それ以外の中には重複している者もいると思はれるが、同異は不明である。

法水分流記、蓮門宗派にも大体右に述べた如き人物をあげているが、その相續等は多少異なる。又仏弋の門に玄道、隠真、勝縁、実智等の門弟をあげている。

又念仏名義集に「……成覚房の弟子善心房親鸞……」と云ひ、御伝鸞賞遷事に「上人配口の後、覚盛法師（後成覚）緯空（後親鸞と号すと相伴て……」と記す事よりみて親鸞も亦幸西に師事していたのかも知れない。以上の如き門弟が居った事が、諸伝によって知られるが、而し之等門弟が如何に散在し、師教を如何に弘通したるかは、今多く知る事が出来ない。

それ以外弘通に就ては、勅伝二九に「……成覚房の弟子等、越後口にして一念義を立てけるを……」と云ひ念仏名義集下（浄全十三八四頁）十巻伝九（浄全十七、二六二）九巻伝六下（浄全十七、二〇二）等にも越後口と云っているから幸西在世の当時、此義は既に都中のみならず遠く越後

地方迄普及していた筈である。又浄土宗流章（浄全十五、五九四頁）には、「……並弘所承流通返通洛陽及州所々」今月之……」と記しているから、京都と両波には最も永く流行した様に思はれる。

尚念仏名義集中（浄全十、三七六頁）には、「所謂相續開会の一念義を頻りに用いたる事は肥後の口也。此義を申す様は念仏には只一念と云う事いみじく貴也。其故は念と云う文字は人二人が心とよむ也。一と云ふ文字をば ひとつとよむ也。されば一念と云ふは人二人が心を一つにするとよむ也。されば男女二人寄合て我も人も二人が心よからん時に一度に只一声南無阿弥陀仏と申すを一念義と申す也」と云って、肥後の口には相續開会の一念義が流行していた事を述べている。

以上の如く此流義の弘通は明かな事はわからないが、初めはその門葉も栄え、洛陽を初めとして越後、両波、肥後等各地方にも普及した様である。而し後次第に振はなくなり、遂にその跡を断絶するに至った。

結

京祖より異義として停止された幸西の一念義の所立を窺おうとするに、彼の著は殆んど現存せず、只僅かに浄土宗流章（浄全十五）、玄義分抄等によりてその一端を知るにすぎない。長伴は衆生が本来具有しているもので、凡夫の信心が仏智の一念に冥合すれば決定往生疑ひなきものであり、一念の外に更に多念を必要とせない。と云ふが如き幸西の一念義は、正に純粋他力であって、その教義は諸空の念仏一類往生義等の他力派の主張と、相離ると雖も決して遠きものではなく、又彼の思想も理趣の無きものではない。彼が宗祖より異端として門下を排斥された事は、まさに同情すべき事であらう。彼の生涯は資料不足等にて明確につかむ事が出来ず、彼の門葉も一時は繁栄したが永く續かなかった様であり、之等幸西の一念義の諸事に就ては、現在に於てはその一端を知る事が出来るのみであって、詳しい事は全く知る事が出来ない。

尚一念義の所立に就ては、浄土宗流章（浄全十五）、玄義分抄、念仏名義集（浄全十）、選擇集戒釈第一、第二、略述浄土教理史等を参考にされたい。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。